櫓下披露興行

璃瑠淨形人の春初 當る午歳

四ツ橋畔 文楽座

午憚口上

皇國の武威は四海に轟き光輝赫々たる新年へとまことに御同慶の至りに奉存候然る處當座に於ては愈々鄕土藝術本來の使命に從ひ一座は職域奉公の熱誠を以て相勤むる覺悟に有之殊に此度は豊竹古靱太夫檜下披露興行と仕り當座秘藏の名曲を而已選擇仕り豪壯華麗なる配列をなし十分に古典の妙味を發揮して平素の御懇情に酬ひ度各々持役に研究を重ね大熱演を仕る可く候間何卒此特別の機會を御見落しなく是非とも御來觀相成り度偏に奉御願申上候

昭和十七年一月元旦

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十七年一月元旦初日

初日午後一時半開演

毎日午後二時開演

（午後八時半終演豫定）

・御觀覽料・

一等席　御一名　金三圓五十錢（一階座席三十錢上り）

二等席　御一名　金一圓五十錢

三等席　御一名　金六十錢（各學入場稅別）

一等御座席〕
一等椅子席〕は五日前より

前賣切符發賣致居候

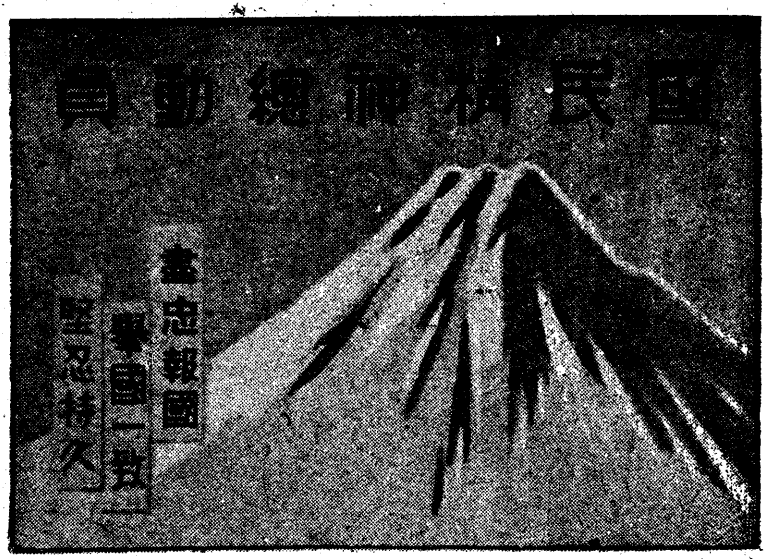
前賣切符專用電話　南㊱四七壹壹番

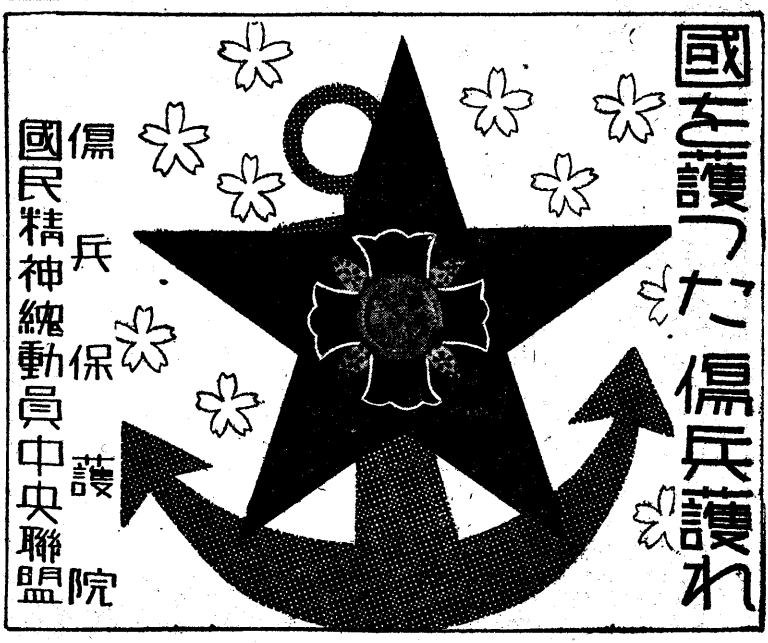
一般御用の電話　南㊱三〇三二番　三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ゐます。

本誌へカットト廣告御掲載希望の向は文樂座宣傳部へ願ひます

◇戦亞東大うか拔ひ戦◇


國民精神總動員
盡忠報國
「擧國一致」
堅忍持久


國を護つた傷兵護れ
傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

櫓下披露興行

當る午歳 初春の人形淨瑠璃

太夫・三味線・人形總出演

一月元旦初日

初日 午後一時半開演
毎日 午後二時開演

（午後八時半終演豫定）

第一 御所櫻堀川夜討 辨慶上使の段

第二 浦里時次郎 明烏六花曙 山名屋の段

紫紅山人作
鶴澤重造作曲・坂東三津之丞振附

第三 新曲 末廣加利 引ぬき壽夫婦春駒

第四 一谷嫩軍記 熊谷陣屋の段

第五 天網島時雨炬燵 紙屋内の段

第六 義經千本櫻 道行初音旅

☆幕間にニュース映畫上映仕り候

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡單に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと――人形淨瑠璃の組織とその由來――舞臺のこと――人形の遣ひ方のこと――だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、鄕土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のはうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線彈きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記錄にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゞつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音樂上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏內容と人形の動作とがピツタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大內鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺――それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、彈く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のことで、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の內側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出影態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黑の頭巾をかぶらずに、出遣ひぱりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音樂は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雜な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

（河竹繁俊氏稿より拔萃）

「紋下」について

祐田善雄

この度、豊竹古靱太夫の紋下披露興行に際して、「紋下」とはどんな重い位置であるか、どうした變遷を持つてゐるかについて簡單に述べてみませう。

紋下といふ名稱は、番附面の紋の下に在る名前から起つた言葉で、淨瑠璃人形芝居の總座頭といふべき重い地位であります。紋下といふ正式の格が、古來定められてあつたといふ譯ではなく、古い番附や古い習慣によつて知られる通り、紋の下に坐つてゐる人が總座頭格である事によつて、自然に呼び慣はされた名稱で、人格、識見共に兼備し、一座の總帥として全責任を負ふ重い位置なのです。

一枚刷りの番附を御覽になれば、枠劃の中が三つの部分から成立つてゐる事がお分りでせう。枠劃の外は、口上、上演年月日時、興行場所、その他仕打の説明ですが枠劃の中は大雜把に分けて、文樂座、松竹の紋、太夫豊竹古靱太夫と一行に通して書いてある部分が一つ、通し外題を含めた上半分の太夫、三味線連名、下半分の人形連名の三つに分つ事が出來ます。紋下の問題は最初の一行について言ふのでありまして、松竹の紋所の下に太夫豊竹古靱太夫の名前を載せる事より、古靱太夫を紋下と呼び、一座を總括する總座頭の權利義務を附隨せしめてゐるのです。太夫の座頭は紋下が兼ねますが、三味線にも、人形にも座頭があり、これを統べる意味で紋下が總座頭になるわけです。

紋下の沿革についてお話致しませう。

古い番附は「紋」と「紋の下」の二つだけで「座名」は書いてありません。座名を書くやうになつたのは明治五年正月松島文樂座興行以來です。この時以後現在見る番附面の形式——座名、紋、紋下——を大體踏襲するやうになりました。明治以後といつても、文樂座以外の芝居、例へば竹田芝居、堀江芝居、大江橋席、御靈社内、稲荷北門、角の芝居、旭座、澤の席を始め、三流四流の小屋、地方興行等の番附には座名がなく、紋と紋の下だけです。明治十四年新町高島座の興行には座名がありま

すが、座名を番附に載せたのは松島文樂座が始めてゞあり、彦六座が明治十七年正月創り、これに倣ふに至つて座名を書く形式がそれ以後現在迄引續いて採用されてゐます。

然しそれ以前の古い番附は座名がなく、紋と紋の下の名前を一行に書く形式です。便宜上、明治以前の紋下に當る部分を「紋の下」と位置によつて説明致しますが、その理由は後に述べます。この形式は非常に古く、番附が出來た最初からでせう。義太夫節の創始者竹本義太夫が筑後掾と稱して在世してゐた頃（約二百三四十年前）からです。紋の下に書かれてゐる人はその頃から總座頭格として一座に重きをなしてゐた事は明瞭であります。筑後掾在世の頃は竹本座の紋の下には筑後掾が坐つて居ましたが、歿後（二百二十八年前）竹本政太夫が紋の下に坐るべき人であるにも拘らず、實際は太夫竹本筑後掾座本竹田出雲掾の連名で二十年も續いたのです。政太夫が二代目義太夫を襲名（二百〇八年前）するに及び、漸く紋の下の座に坐る資格が出來て、座本竹田出雲掾と並んで太夫竹本義太夫の名を見るに及んだのであります。

二代目義太夫の播磨少掾は古播磨と謂はれ、西風を創始し、義太夫節を大成した人ですが、この方が亡くなると（百九十八年前）又紋の下の太夫は空位で、太夫竹本義太夫、座本竹田出雲掾の連名の時代が六年程續きました。紋の下に坐る資格の太夫がなかつたからでせう。播磨少掾の七回忌（百九十二年前）に、竹本大隅掾が紋の下に加はり、竹本筑後掾、太夫竹本大隅掾、座本竹田出雲掾と三人連名になつてゐます。死んだ筑後掾迄引出しての三人連名です。大隅掾は翌年大和掾と改めた斯道の名人です。大和掾時代も三人連名です。竹田出雲掾がこの紋の下の太夫撰定に如何に愼重であつたかゞ伺はれます。一方、豊竹座は豊竹越前少掾が上野少掾と稱した昔より、芝居主（名代）と座本と太夫とを兼ねた人ですから、上野少掾、越前少掾を通じて紋の下に名前を見受けます。一世一代の「北條時頼記」（百九十七年前）を演じて以後、太夫を引退して座本に坐り太夫は二代目豊竹上野少掾に讓り、座本太夫の連名時代が二年續きますが、上野少掾が退座するに及び、再び座本と太夫を兼ねて越前少掾が獨占します。忠臣藏の騒動（百九十四年前

）で此太夫が竹本座を退座して豊竹座に走り、東西の風の混淆を來す事件が起り此太夫が翌年豊竹筑前少掾（百九十三年前）を受領するに及び、紋の下の太夫として筑前少掾の名が座本越前少掾と共に番附面に現はれるやうになりました。

竹本座、豊竹座の最盛期の頃、紋の下の太夫の格式を如何に重んじてゐたかゞ分明でせう。御所から掾號受領したものか、或はそれと同等の資格のあるものがなつてゐます。太夫の格が弱い時には座本が出てこれを助けてゐるやうです。自然紋の下の太夫は非常な權威を持つて居り、當時の物の本には「太夫本」と書いてありますがこれは後の太夫元とは違ひ、唯今の紋下の意味と似通ふてゐるやうです。筑後掾死後、竹田出雲掾や豊竹越前少掾が采配を振つてゐた四五十年間は秩序立つてゐて權威がありました。

竹本座、豊竹座が崩壞するにつれ、紋の下には色々の名前が見えます。座本、名代、後見、太夫元、太夫等、種々雜多あり、中には座本近松門左衛門迄飛出します。然し人形や三味線の名前は決して見えません。櫓下忠孝昔物語といふ變なものも出て來ます。これは水野越前守の天保改革の槍玉に上り、天保十三年五月十六日（再度命令は七月廿五日、百年以前の事）幕府の命で大阪市中の宮芝居が廢止になり、御靈芝居、稲荷文樂芝居も退轉の止むなきに到り、堀江市の側、竹田芝居、横堀清水町濱の小屋等で轉々打つて居た有樣だつたのです。七代目團十郎や中村富十郎がお咎めを食つたのも此時です。實際太夫や人形遣は困りました。この時、忠孝昔物語と題して、淨瑠璃ではなく、昔の忠孝美談顯賞の爲の物語をするといふ立前で客を呼びました。これは江戸の竹本播磨太夫が兩國橋詰席で演じたのを眞似て、當時の制法を裏から利用したものです。こんな苦しい興行方法を採用して露命を繋いで居る中に、禁制も緩み、稲荷の小屋に復歸して文樂芝居を打つ事が出來るやうになりました。

明治の聖代に入り、文物すべて革る時、明治五年正月松島に文樂座を新築すると共に、萬般施設の改革を斷行しました。小屋も大きくなるにつれ、太夫の語り風、人形の大きさ等迄影響を齎すのも自然の數でせう。文樂芝居を改めて、番附面に「御免文樂座」と掲げました。從

來番附面の紋は、紋の下の太夫等の紋を用ひてゐたのですが、これも改めて、文樂座の紋、即ち丸に文の紋所を附けるやうにしました。始めて人形紋下を定め竹本春太夫、吉田玉造の二人紋下を置き、紋下の上に大改革を加へたのです。紋下の語もこの頃から起つたのではないでせうか。尠くとも、紋の下の部分に政治的營業政策を加味する色彩濃厚になつたと言ふ事が出來ませう。次に紋下の意味が擴大したのは、三味線紋下を創めた事で、明治十六年四月、竹本長登太夫、豐澤團平、吉田玉造の三人連名ですこの時の事を團平妻加古千賀は「此芝居初日前紋下の事に付文樂ともめ合に相成すでに休行ノ處文樂番附ほり直し色々太夫殿中に入事相濟候也」と自ら書留めてゐますが、この揉め合ひは、吉田玉造が拒止したとも言はれ、或は商法會議所で紋下の說明をした折、太夫人形に紋下があるにも拘らず、三業寄合世帶の淨瑠璃人形芝居に三味線紋下のない理由を問はれて團平が三味線の代表者として紋下に入つたとも言はれてゐます。然し明治十六年正月の京都興行の番附には、竹本長登太夫、豐澤團平吉田玉造と名代二人の五名連記の紋下ですから團平の紋下入りには深い事情が潛んでゐるのでせう。人形の紋下、三味線の紋下はかくして始まると共に、紋下といふ語に政治的營業政策が加はり、その位置が重いものになつて了ひました。文樂座、彥六座、稻荷座を通じて、人形紋下には吉田才治、吉田辰五郎がありますが吉田玉造が亡くなると消滅し、三味線紋下も豐澤團平が歿して豐澤廣作が繼ぎましたが、豐澤廣助が亡くなるに伴ひこれも消滅し、それ以後紋下は太夫が獨占するやうになりました。文樂座では春太夫、實太夫の長登太夫、越路太夫の春太夫の攝津大掾、二代目津太夫、三代目越路太夫、三代目津太夫を經て古靱太夫が襲ふ事になり、彥六座その他では、重太夫、住太夫、組太夫、大隅太夫彌太夫等です。先代の古靱太夫も明治初年、反文樂派の驍將として紋下即ち櫓下を勤めてゐた人です。

紋下の語が通稱になつたのは明治以後ですが、文樂座を松竹が經營（明治四十二年四月）するやうになつて以來といふ說は當りません。加古千賀自記の書留めによつても明らかな通りです。又一方では櫓下とも呼んでゐました。これは紋下より以前から引續いて呼んでゐた通稱

です。櫓下には色々の説がありますが、欅の一枚看板に總座頭の名を書いて、淨瑠璃人形芝居の表、丁度櫓の下に當る中央の處に据えてゐる事より略稱したのではないかと思ひます。古く竹本座、豊竹座の時代には、櫓に櫓幕を張廻らし櫓幕に座の紋所を記し、紋の下に總座頭の名を書いてありますが、淨瑠璃の方ではこれを以て櫓下とは呼んでゐないやうです。櫓下といふ名稱が盛に用ひられた幕末の頃は、全く幕府の彈壓下にあつて萎縮してゐた時代ですが、この名はずつと明治以後迄用ひられてゐます。それ以前天保の頃（約百年餘前）には便宜上座頭とも呼んでゐたやうです。それより以前に遡ると、どう呼んでゐたか不明なので、こゝでは總括して、明治五年以後を「紋下」と呼び、それより以前は、單に位置を示して「紋の下」と説明しておきましたが、紋の下、座頭、櫓下、紋下は大體似たやうな職掌を持つてゐるやうに見受けられます。唯紋下と呼ばれるやうになつてから他の名稱を排斥する事なく、櫓下とも言ひ、便宜上座頭とも呼んでゐるやうですが、紋下には意識的に政治的營業政策が加味するやうになつて來た事は注意する必要がある事と思ひます。

文樂座檜下の代々

―明治期以後―

◇六代目　竹本染太夫

（「新薄雪物語」兵衛屋敷の段）

五代目染太夫事竹本越前大掾の門弟、慶應元年正月興行より稲荷文樂軒芝居の檜下となる。明治二年五月一日歿、行年七十三才、「染太夫日記」の著あり

◇五代目　豐竹湊太夫

（「加賀見山櫛錦繪」長局の段）

初め三代目土佐太夫の門弟なりしが、師の歿後三代目竹本長登太夫の門弟となる。前記染太夫歿後、その後を繼いで明治二年五月より文樂軒芝居の檜下となる。同四年十一月興行限り引退、同十年六月廿五日歿、行年七十八才。

◇五代目　竹本春太夫

（「繪本太功記」尼崎の段）

三代目氏太夫の門人、明治五年一月松島文樂座竣工の時より文樂座檜下となる。同時に人形初代吉田玉造も檜下に入る。同十年七月廿五日歿、行年七十才

◇四代目　竹本實太夫（後に四代目竹本長登太夫）

（「義經千本櫻」堀川御所の段）

三代目竹本長登太夫の門弟。前記春太夫歿後、當時文樂座の最古老なるを以つて明治十一年一月より檜下となり、同十六年一月四代目長登太夫を襲名、二興行にて檜下を退き床頭取となる。同二十三年十月二十二日歿、行年七十七才。「淨瑠璃大系圖」の大著あり。

◇二代目　竹本越路太夫（後に六代目竹本春太夫、又竹本攝津大掾を受領）

（「新版歌祭文」野崎村の段）

五代目春太夫の門人。明治十六年四月興行より文樂座檜下となる。この時三味線初代豐澤團平も檜下に入る。同三十六年一月春太夫の六世を襲名。同年五月より攝津大掾と名乘る。大正二年四月引退、檜下は同四年一月興行まで勤む。同六年十月十九日歿、行年八十二才。

◇二代目　竹本津太夫（後七代目竹本綱太夫）

（「近頃河原達引」堀川の段）

竹本山城掾（後に山四郎）の門人。明治二十三年文樂座檜下越路太夫一時上京中、留守宅を守りし功に

より同二十四年二月興行に限り櫓下に座る。次の興行より越路太夫歸阪して櫓下舊に復す。同四十一年に文樂座を引退、後七代目竹本綱太夫を襲ぎしが遂に立たず、同四十五年七月廿三日歿、行年七十四才

◇三　代目　竹　本　越路太夫

（「伊賀越道中双六」岡崎の段）

二代目竹本越路太夫の門人。大正四年二月興行より文樂座櫓下となる。同十三年三月十八日歿、行年六十才。

◇三　代目　竹　本　津　太　夫

（「一谷嫩軍記」熊谷陣屋の段）

元竹本濱太夫の門弟、後二代目竹本津太夫の門に入る。大正十三年五月文樂座櫓下に入る。昭和十六年五月七日歿、行年七十三才。

◇二　代目　豐　竹　古靱太夫

（「一谷嫩軍記」熊谷陣屋の段）

昭和十七年一月興行より新櫓下となる。その略傳は別項參照。

（鴻池幸武氏稿）

文樂座小史（昭和十六年調査）

○竹　本　座　創　立（現今ヨリ二百五十七年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）

○文　樂　座　發　祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪ヘ來ル

○第一次稻荷社內時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社內時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社內時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

辨慶上使の段

武藏坊辨慶　竹本七五三太夫
腰元しのぶ　竹本常子太夫　竹本宮太夫
侍從太郎　竹本豐竹富駒太夫
妻　花の井　竹本三瀧太夫　竹本叶美太夫
卿の君　竹本常子太夫　竹本宮太夫　竹本豐竹越名太夫
女房おわさ　竹本源太夫　竹本雛太夫
鶴澤綱造

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

元文二年（二三九七）一月竹本座に上場された文耕堂三好松洛の合作になる全五段もので、この「辨慶上使」は第三段目に當る。作全體の內容は、梶原景高、土佐坊昌俊の二人が源義經の問罪使となつて上洛する。梶原は義經を陷れて己れの非を蔽はんとの魂膽、土佐坊は是を知つて、義經を庇護せんとの心、かくて二人の入洛によつて、義經主從とこの二人の間に樣々の葛藤波瀾を起すと云ふ筋立てゞ、平家物語、義經記を素材として義經、辨慶、伊勢三郎、靜、土佐坊、等々を點出活躍させ、多くの史實、傳說を織込んだ作者苦心の作である。

梗概

こゝは侍從太郎と呼ぶ人の館である。この侍從太郎と云ふのは平朝臣時忠卿の執權職で、時忠の姫君で今は義經公の北の方の卿の君の乳人である

卿の君は義經公の胤を宿して懷胎中なので、保養を兼ねてこの侍從太郎の館で假居をして居るのである。

丁度、義經は平家を滅して堀川御所に飛ぶ鳥も落す勢ひであつた。義經の兄頼朝は生來疑ひ深い質で、義經が平家方たる時忠卿の娘卿の君と結婚したのが若しや自分に謀叛でも起す下心からではないかと不審を感じ、その申し開きには卿の君の首を打つて差出せとの難題を云ひかける。そしてこの侍徒太郎の館へその首を受取りに武慶坊辨慶を寄越すことになつた。

卿の君は太郎の妻花の井、腰元しのぶや、久し振りで訪ねて來たその母親おわさを中に大勢の腰元共と打ち輿じてゐた折、辨慶がこの館へ現はれたのである。

そして何か重大な要件でもあるのか、辨慶は太郎夫婦共々奥の間へ——。續いて卿の君、腰元共も。

人形役割

卿の君　桐竹門次
侍從太郎　吉田玉德
妻花の井　桐竹紋太郎
腰元しのぶ　桐竹紋司
女房おわさ　吉田光之助
武藏坊辨慶　吉田文作

後にはおわさとしのぶが懐かしげに親子相逢ふ歡びに浸つてゐた。

しばらくして、浮かぬ様子の侍從太郎と妻花の井が現はれ、おわさに向ひ今日の辨慶が上使の仔細を語りきかす。辨慶が今日の役目は卿の君の首を打つことであるがそれは忍びない。誰か身代りでもと云ふので考へ付いたは腰元しのぶ、年頃と云ひ器量と云ひ、首打つて賴朝公に卿の君の御首と云つて渡しても疑はれまい、何卒しのぶの命を主の身代りに貰ひ度いと無理な賴み。

然し、おわさはそれを拒絶する。しのぶは主のためだから死ぬといふ。そこでおわさはしのぶを殺す事の出來ない譯があるとて、自分の左の肌を脫いで振袖の片端を出し、十八年以前、頃は夜も長月の廿六夜の月待ちの夜、二八餘りの稚兒姿の知らぬ男と契つた物語をし、「假り寢の情は淺けれど、妹背の緣や深かりけん……」その月より身も重く、產落したのがこの娘しのぶで、今日まで

母娘が憂き苦しみも、如何かして知らぬ父に娘を逢はしたく、その夜のかたみのこの振袖を便りに父親を探してゐるとの涙の述懐。

おわさが語り終つて娘を連れて立たうとした時突然障子越しに刀が突き出て娘しのぶの脊中を抉る。皆がアッと驚く途端、奥正面より今日の上使武蔵坊辨慶が、黒地に輪寶の模様の大紋を着て、血刀を提げて悠然と立出る。これはと驚く皆の眞中にどつかと座した辨慶は、「是には深い仔細のある事、これ見よ」と我が身の片肌を脱ぐ――とこれは意外、おわさがかたみの振袖と對の模様の紅の大振袖の伊達模様、十八年前におわさが假寢の契を交した稚兒播州書寫山の鬼若丸、おわさが多年尋ねる戀しい夫、しのぶが片時も忘れ兼ねた險の父こそ、この武蔵坊辨慶であつた。

辨慶は、しのぶは自分の娘だから主君の身代りにするのだと話す。

おわさは始めて總べてを納得したが、手負のしのぶは委細も知らず、現在生みの父親の手に掛つて息絶える。

おわさはしのぶの死骸に取り付いての愁嘆――流石に辨慶も父として名乗りもせずに我が手に愛し娘の命を奪つたことの悲しく、

「生れた時の産聲より外には泣かぬ辨慶が卅餘年の溜涙一度に亂すぞ果しなき……」

と泣きに泣き入る。

やゝあつて時計の音。

辨慶は心を取り直し、侍從太郎に娘の首を討つて渡せと云ふ。太郎はしのぶの首を落すと直ぐに自分も切腹し、卿の君の乳人侍從太郎の首を添へて差出せばよもや贋首とは誰も思ふまいと云つて死ぬ。

辨慶も成程と頷づき太郎が首を打ち、二つの首を白布に包んで左と右に抱きかゝへ、

「卿の君の御首、侍從太郎の首諸共、武蔵坊確に取つた――」

と呼ばはり、おわさ、花の井の名殘りを惜しむを振捨てゝ堀川御所へ歸へつて行く……。

（佐和利）　辨慶上使の段

なふコレ待て下さりませ、僞り者と言れては親故此子の道立ず、顏もしらず、名もしらぬ、夫を尋ぬるしるしは是と、上の一重を押脫ば、右はかはらぬ詰袖に、左ばかりは振袖の、濃紅の染模樣、橘ならぬ袖の香の昔床しく忍ばしく、娘が聞前恥かしき昔咄し、私元は播州姫路の近在福井村、本陣の何某こそ、私が父母、十八年以前頃は夜も長月の、廿六夜の月待の夜、數多泊りの其中に二八餘りの稚兒すがた、こつちに思へば其人もすれつもつれつ相生の松と松との若みどり、露の契りが緣のはしヲ、恥かしやつい、暗りの轉び寢につらや人の足音に戀人も驚きて、起行く袂ひかゆるを、振切急ぎ行く拍子、ちぎれて我手に殘りしは此振袖、かり寢の情は淺けれども、妹脊の緣や深かりけん、其月より身も重く、懷胎し後にて何と詮方も、產落せしは此信夫、緣あればこそ子迄もふけしもの、此振袖をしるべにて、再び尋逢んと國を出て拾七年、水子をかゝへさまゞとさまよひめぐりしうき艱難、今に尋逢ね共女の念力、是こそは娘よ父よと名乘合するそれ迄は、身にもかへぬ大事の娘、お役に立ぬは右の譯、卑怯未練でない申し譯、娘にはどふぞお隙を下さりませ。

浦里時次郎

明烏六花曙

山名屋の段

明和六年七月三日（二四二九）幕府御賄方伊藤伊左衛門の悴伊之助（廿一才）と吉原蔦屋の遊女三芳野（廿四才）との情死事件は江戸では珍らしい心中沙汰とて世間で隨分評判になつた。丁度其頃流行の新内節にこの心中は唄はれて、安永元年（二四三二）鶴賀若狭掾の「明烏夢泡雪」となり、その心憎いまでに凄艶な哀調を帶びた旋律は人の胸にひしと迫つて、江戸市中に大いに流行した。

この新内「明烏」がやがて大阪の大西芝居に、嘉永四年三月（二五一一）よりかゝる事になり大當りをとり、大成功を收めた。（江戸では嘉永四年二月、市村座で清元「明烏花濡衣」として上演された。）

かういふ大勢に刺戟されたものか、嘉永六年二月（二五一三）大阪新築地清水町濱の竹本綱太夫の操芝居で、「明烏雪の曙」と題して山名屋の段を出した。これが人

山名屋の段

前　竹本伊達太夫
　　野澤勝平
後　竹本相生太夫
　　野澤吉五郎
胡弓　野澤吉藏

形芝居の「明烏」の始めで、こゝに新内節のそれに多少の潤色が加はつて義太夫化が成つた。越えて翌安政元年四月（二五一四）道頓堀竹田の芝居で興行された時は外題も今日の「明烏六花曙」となつた。尙、この義太夫の「明烏」は、文久元年十月（二五二一）御靈裏門の芝居では「明烏雪花葩」、同三年三月（二五二三）稻荷境内東小屋では「明烏雪花廓」の外題でも上場されてゐる。

人形役割

傾城浦里　桐竹紋十郎
禿みどり　桐竹門次
髪結お辰　吉田文五郎
時次郎　吉田榮三郎
亭主勘兵衛　吉田玉市
やり手おかや　桐竹政龜
手代彦六　吉田玉藏

梗概

吉原山名屋の遊女浦里は春日屋時次郎と深く契りを交して、禿のみどりと呼ぶ娘まで生した仲であつた。

時次郎は紛失した御主人の重寶臥龍梅の一軸を詮議の爲めに苦心してゐたが、その一軸こそ、この山名屋の亭主勘兵衛が横領してゐるのだつた。

その事を知つてゐる亭主勘兵衛は、だから浦里を時次郎から引き離さうとして二人を逢はさない樣に仕向けた。堪かれた時次郎はそれでも忍んで會ひに來るのだつた。

其の日も山名屋の塀外まで忍んで來た時次郎は二階の浦里と悲しく目配せするより途はなかつた。然し、髪結お辰の情ある計ひで、やつと裏切戸から身を山名屋に入れる事が出來た。それは悲しい嬉しい逢瀬だつた。

積る口説の數々も束の間、遣り手婆のおかやに引き立てられて、浦里は禿みどり諸共、亭主勘兵衛の前に投げ出され、折から降りしきる雪の庭先きに竹箒の責め折檻を受けねばならなかつた。

身を隱して二階から、この地獄の責苦に泣き號ぶ浦里みどりを見てゐる時次郎の胸は、千々に引き裂かれる樣だつた。

「アノ床に懸つた金岡の一軸、詮議などゝは片腹痛い。コリヤ、この事を時次郎に賴まれたに違ひない。白狀せい。時次郎は何處に居る。夫れを吐かせ……」

――嬉しや、亭主の口から自づと日頃尋ぬる寶物の在り所が判つた。これこそ神の助け……。

而も浦里に横戀慕のこの家の手代彦六の己惚れから、浦里、みどりの繩は解かれた。二人は九死に一生を得た。

屋根傳ひに庭に下り立つた時次郎は、素早く寶の一軸を奪ひ取つた。

まご〳〵まごつく彦六を殘して時次郎は、娘みどりを脊に負ひ、浦里の手をとつて切戸口から何處ともなく逃れ出る。

折から明の烏が飛び交ふて、春の淡雪は身にしみて冷たい……。

（佐和利）

山名屋の段

涙ながらに時次郎、何時迄くどき歎いても、歸らぬ今の我身の不運、迚も生きては居らぬ此の身、和女も共にといひたいが、二人一緒に死すならば、跡で可愛や此綠は、どうなるものぞ不憐やな、今死ぬる身を存へて、我去き跡で一片の、回向を賴む浦里と、聞く程せきくる涙ながら。ソリヤ餘りじや情ない、今宵別れて私が身や、可愛綠は何とならうと思わんす、死なねばならぬ覺悟なら、三途の川もコレ此樣に、親子手を執り諸共と、何故にいふて下さんせぬ、氣强い男とばかりにて、身を顫はして泣居たる、心ぞ思遣られけり。

浦里重き顏を上げ、誰を恨みん身の罪科、戀故今の憂き苦勞、我身一つは厭はねど、何にも知らぬ此綠、斯る憂目を見せるのも、皆私から起つた事、堪忍してたも怺へてたも、子供心に聞分けて、親は目先にありながら、陽氣浮氣の酒事に、所體崩して殿御の事、逢たい見たいとしどもなき、母を持つたが其方の因果、因果同志が報ひ來て、惡緣深き契じやと、前後も更に辨へず、庭に咬付き伏轉び、流す涙は春雨に、雪解け亂す許りなり。

紫紅山人作
鶴澤重造作曲・坂東三津之丞振附

新曲 末廣加利

引抜き 壽夫婦春駒

本曲は今度初めて上演される事になつた新作の所作事で、さきに「紅葉狩」「名和長年」等の新作淨瑠璃を發表した西村紫紅山人と鶴澤重造の同じコンビになるもので、別項作者の言葉を御覽下さつて本曲の意味するところを御了解下さい。

（床本）

新曲 末廣加利

引抜き 壽夫婦春駒

異竹の節に紙をば張り替へて傘も扇も末廣ふかりの浮世の笑ひ艸、これは隱れもない大名でござる、先づ太郎冠者を呼び出して申付うと存ずる、ヤアイ太郎冠者あるか、ヱーイハヽアおん前に、ヤ念なふ早かつた、扨汝を呼び出すは餘の儀でない、明日いづれもをお招き申そうと存ずるが何とあらうな、まことに内々は御意なうても

末廣加利

太郎冠者　竹本住太夫
傘賣　竹本相生太夫
　　竹本織太夫
大名　竹本源太夫
　　豐竹つばめ太夫
ツレ　豐竹呂賀太夫
　　豐竹富太夫
　　豐竹千駒太夫
野澤喜代之助
竹澤團六
鶴澤鶴太郎
豐澤新太郎

鶴澤友十郎　竹澤團作

人形役割

大名	桐竹門造
太郎、冠者	吉田榮三
傘賣	吉田光之助
引抜き壽夫婦春駒	豐竹和泉太夫
	豐竹呂太夫
	竹本伊達太夫
	竹本三瀧太夫
	竹本叶美太夫
	竹本さの太夫
	豐竹宮太夫

申上うと存じまいた所にこれは又一段とよござりませうウ、よからうな、ハ、ア、そうあれば引出物には何を出そうナ、されば何がよござりませうぞ、ヤ思ひついた今某は末廣がりを出そうと思ふが何とあらうぞ、ようござりませう、汝は大儀乍ら上方へ上り急いで求めて參れ、畏つてござる。モウシ〳〵頼ふだお方、何事ぢや、今仰せられた詞は立て板に水を流すやうでトント耳に入りませぬ、じやに依つて書きものを下されい、ヤ心得たソレ此書き物にある通りのものを求めて參れ、エ、急げ〳〵ヲ扨頼ふだお方の氣の短かい、然し此書きものさへあれば心丈夫といふものじや先づ急いで參らう、野山を越えて都路や、往さ來るさも賑はしき。

町中繁昌と夫婦連れ、心も勇む春駒が佳き歳祝ふ初姿蓬萊に聞かばや伊勢の初便り、ヤレ〳〵〳〵咲いた櫻に駒をばつなぎや、駒が勇んで花が散る、散るは櫻か櫻が武士か大和心の勇ましや、戰さのにわに立つ人と力を合す勳しは、白馬黑馬栃栗毛、芦毛石かけどう〳〵〳〵、どつと上つたあの水烟り、宇治の川瀨か隅田の川か、春はあたごに櫻を手折り、秋は嵯峨野に冴ゆる月、志賀の

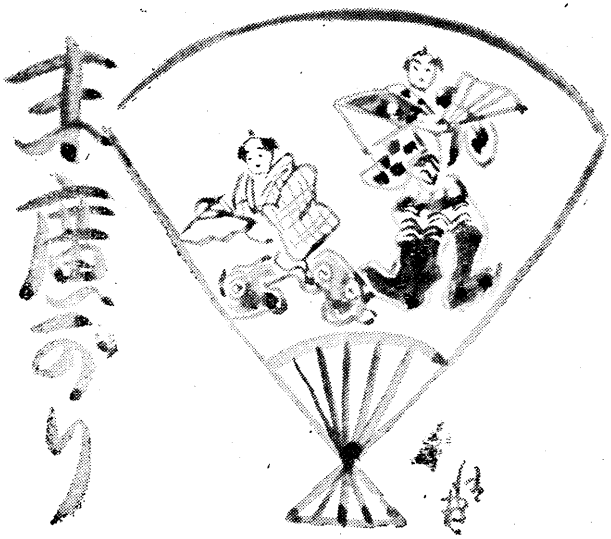
竹本越名太夫
豐竹伊勢太夫
鶴澤叶
野澤勝平
鶴澤友衛門
野澤八造
鶴澤友花
鶴澤友三郎
豐澤仙三郎
鶴澤一郎右衛門

人形役割

男春駒　吉田文作
女春駒　吉田榮三郎

湖白波立てゝ、シャンと跨る綿繰り馬や、手綱片手に馬子唄歌ふ、阪は照る〳〵鈴鹿は曇るあいの土山雨が降る降るは涙か時雨るゝ母子、夫の爲めには貯へ置いた黄金花咲く山内や、擡原多助のあの青見さい、お主の仇をば討つたげな、打つた碁盤に名高いものは、その名も怖い鬼鹿毛よ、それは昔の物語、今は日の丸背中に立てゝ、萬里の曠野に踏の音も、かッつかつ〳〵勝ち軍、響は永く殘るらん、歌ふも舞ふも初春を、目出度祝ふ讃へごと心の駒に手綱をば、引きしめ〳〵いざ共に、サア〳〵どざれと打連れて、足もいそ〳〵急ぎ行。

急いで參る程に早や都と見へて賑はしい事でござる、眼に見るもの、耳に聞くもの皆珍らしいもの斗りじや、ヲヽそうじや大事の御用の末廣を求めねばならぬが扨て末廣屋を存ぜぬがアヽ困つた事じや、ヲヽそれよ欲しいものは呼はるがよいと申す、末廣買はう〳〵街の左右をうろ〳〵と呼はり歩くぞ笑止なる。罷り出でたるは洛中に住居致す心も直にないものでござる、ハハア何者やら大聲で呼はつて參るが、末廣買はう〳〵、ナウ〳〵其方は何をわめいておらるゝぞ、されば其事でござる、田舍



者でござれば、末廣屋を存ぜぬによつてかやうに申すのでござる、ノウそなたは末廣といふものを知つておぬやるか、ウン、インヤ、ウン存じてござる、知つて居ればこそ買はうとは申す、ヤこれはあやまりました、某は末廣屋の亭主でおりやるに依つて念の爲めに問ふたまでじや、ホヽウハテ扨これは仕合せな事でござる、シテ末廣の出來合はござるかな、なか〳〵ござるとも〳〵、急いで見せさつしやれ、心得てござる、それに待たしやれいハハア、イヒハハハ、あの田舍人はほんの末廣を知らぬと見ゆるが、ヤレ扨末廣を賣らうとは申てござるが、エヽマ何を賣りませうぞ、あれかこれか、ヤ思ひついた事がござる、これに傘がござる程にこれを持てゝ賣りませう、ノウ〳〵田舍人それにござるか、ソーレこれは如何でござるの、ホヽウこれが末廣でござるか、なか〳〵、どれ見せさつしやれ、ヲヽ、ソヽそーれごらんしやれ、ハヽア誠に擴げさつしやれたればハテいかい末廣でござる、さり乍ら賴ふだお方が注文のおこされてござる程にこれに合ふたらば買ひませう、さらば讀まつしやれい、先づ第一は地紙の事よ、强い厚いが所望でござる、オツ

ト地紙は大和は宇田のほんの楮を清水に晒し、張つて乾いたその上に油を引く事三百遍、師走狐の鳴くやうに、コン〳〵〳〵と申します、ホンに成程其次は骨の磨が氣にかゝる、骨の磨きは此の通りかの鎭江の七賢人竹林中のよい竹を撰りにえらんだ其上に、信濃木賊で磨き上げツルリ〳〵の上仕上げ、要元をば締めてとござる、要は元より肝腎要、サツト擴げて此金でじつと締めたを申すのぢや、次にざれ繪は如何あらう、サアざれ繪〳〵、ホンにざれ繪は某とそなたがエーヤツと、ヤこれはしたり其方は田舍者じやと思ふて打擲めさるか、アヽイヤ打擲ではおじやらぬ、こなたと某とこうしてざれるを以て即ちざれ繪といひまする、ヤ扨も〳〵注文に合ふてかやうな嬉しい事はござらぬ、早速に求めませう、シテ價は如何程でござるぞ、高値でおじやる、如何程でござるぞ、萬疋でおじやる、エヽマヽ萬疋、これは又高い事でござる、ちと値切りませう、ヲヽ少し位ならばまけてやりませう、ナント百許りになりますまいか、ノウそこな人何といわつしやる、そのやうな下値なものではおりない、エヽ迚もそなたはよう買やるまいぞ、申し〳〵そなたは何と聞かしやれたぞ、萬疋の中を百許りもまけて下されまいかと申したのでござる、ハヽア分りまいた、それでは五百まけて進ぜう、忝うござれ、シテ代物は何處で渡されまする、三條の布袋屋で渡しませう、これで受取りませう、忝うござる、さらば、さらば、アアハヽヽ、古傘を末廣と申したれば悦んで持ち歸るわ、アハヽヽヽ、ヤこの末廣を賴ふだ人へ屆けたらばお賞めの詞もあらうエヽ忝い〳〵、あの田舍人はよほど正直者と見ゆる、あまり不便に存ずる、ノウ〳〵、何用でござるぞ、そなたの樣子を見る所定めし主持ちでござろ、ナカ〳〵人の主は機嫌のよい事もあり又惡しい事もあるもの、若し機嫌の惡しうおじやる其時は、斯うおしやつたがようおじやろ、ウン〳〵、ナ、ウン〳〵〳〵扨も忝うござれ、さらばぞ、オヽようおりやつたさらばぞ、アヽ待遠や〳〵、何れもをお招きする引出物を求めにつかわしたが定めし見事な末廣を求めて歸るであろ、アヽ草疲れたぞ〳〵、賴ふだお人に急いでお目にかけうず、殿樣ござりますか太郎冠者戻つたか、歸りました、ヤアラ太儀や急いで見せい、ハヽア仰せらるゝ通りのものを求めて參りました

それば重畳じや急いで見せい、こりヤ何じや、エ、末廣でござりまする、これがや、ハア殿様の御合點が參らぬこそ道理でござりますれ、コレから致しますときつう廣がりまする、フンまことにこれはいかい末廣じやわいやい、シテおのれは注文に合して來たか、ナカ〳〵合わせる段ではござりませぬ、ソレ此書きものを、それで讀まつしやれませい、ヲ、急いで合せおろ、先づ地紙良しとハ、アそれこそ念をつかひましたれ、この紙の事でござろ、師走狐の鳴く如くコン〳〵といふ程はつてござりまず、シテ又骨磨きは、ハ、ア此骨の事でござる、信濃木賊をかけて磨き上げ、ツルリ〳〵と致してござります、要元締めては如何じや、かう擴げましてこの金で締めるを以てこれが要元締めてといふ所でござる、さらば繪はざれ繪と申したが、サア其ざれ繪につきましては、エ、モそれは餘程の念をつかひましたれ、マ、それに待たつしやりませ、ヤツ覺へたか、ヤこれは何としおるぞ、アヽマ、先づ待たしめ〳〵、イヤ申この柄でこうしてざれるを以て即ちざれ繪、ヤイ〳〵〳〵そこな奴、おのれは知らぬが定か、ハ、ア存じませぬ、エ、知らずばこれへ寄りおろ、末廣とは扇の事ぢや、コリヤおのれは古傘を買ふてうせて、イヤ末廣で候の、ざれ繪でござるなどとエ、たわけ奴が、某が前へは叶わぬ退りおろ、ヤレ扨憎い奴かな、まことに頼ふだ人の云はるを聞けばこれは傘じやけな、エ、ひよんな事を致したわい、さりながら都の者が機嫌直しを敎へて呉れた、先づ急いで申して見せうず、傘をさすなら春日やんま、これも神の誓ひぞと、人が傘さすならおれも傘さそうよ、實にも此世は一つの傘の、東の海も南の洋も、四邊四隅を一つの宇に、おさめて共に榮へて行かむ、げにもさありげにもそうよの、コリヤ〳〵太郎冠者、買物にぬかれて囃しものをすると前代の曲者、身が前には叶ふまいぞ、實にも東の空明けて、旭かゞやき和らぐ御世を、ひらき導く我が日の本や、これも神の誓ひぞと、人が傘さすなら我も傘さそよ實にもそふよげにもさあり、エ、コリヤ前代の曲者やるまいぞ〳〵。

る將士の赫々たる武勳の影に涙ぐましい軍馬の功の潛む事も又見逃がせない。私は此午年の劈頭に際して軍馬の勳功を稱へるべく、又古來の名馬禮讃譜として、佐々木高綱、阿部豊後守、由垣平九郎、小栗判官、さては山内一豊の妻等々十種の馬物語りを羅列して景事的な散文詩やうのものを綴つて見たのである。

作者の言葉

紫紅山人

◇末廣がりに就て

末ひろがりは目出度い能狂言として慶祝の際には古來から屢々上演せられたものである。同じ材料である紙と竹と用ひて製作せられたものだが、用途が全然異つてゐる扇と傘、即ち大名は扇を望んだに對して太郎冠者は傘を求めて來た。然し擴がる點に於て一致してゐるといふ、比喩に富む一笑話。私は此末廣がりに新東亞建設と八紘一宇を寓意して淨曲化して見たのである。幸ひに御清鑑を得ば幸ひである。

◇壽夫婦春駒に就て

夫婦春駒は從來人形淨瑠璃として上演せられた事もある。それは稚兒源氏の一齣で、極めて短かいものであり且又現代人には解し難い字句もある。幸ひ今年は午年である。午は馬に通ずる。聖戰茲に五星霜、我忠勇義烈な

口上

御稜威のもと、赫々たる戰勝の報を承はり國内には瑞氣漲りまことに輝やかしき新年を迎へまして皆様にも御氣嫌麗はしく遊ばされましてお欣び申上ます。

偖而此度當文樂座々主白井松竹會長の御認許を得まして　不肖儀　文樂座檜下の榮位を汚すことゝ相成りましたが、何分にも藝道は生涯が修業にございますので、尚々一層努力奮勵を致しまして、此古典藝術の光輝を發揚いたしたい念願にございます。

何卒此上とも御指導御鞭韃の程を只管御願申上げます。

一月一日

二世　豐竹古靱太夫　敬白

一谷嫩軍記

熊谷陣屋の段

寶暦元年十二月十一日（二四一一）から豐竹座上場。作者としては淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏豐竹甚六等五人の名を連ねて居る上に、故人並木宗輔の名をも掲げて居る。（並木宗輔は寶暦元年九月、本曲の第三段目までを作つて歿し、そのあとを他の淺田一鳥等が追加して一篇に纏め上げて上場を見るに至つたと云はれてゐる。）その主材は平家沒落の哀史中、一谷に於ける平敦盛と熊谷直實との組打、藤原俊成と平忠度との訣別、平忠度と岡部六彌太との合戰等からとり、全五段の中、二段目の一の谷陣門から組打に續いて「流しの枝、林住家」になり、次いで三段目の「脇ケ濱、寶引」からこの陣屋へと發展して行く美しくも哀しい戰物語で、熊谷陣屋の段が全篇の山となつてゐる。

梗概

爰は攝州生田の森なる熊谷次郎直實が陣屋で、

熊谷陣屋の段

中　竹本大隅太夫
　　鶴澤清二郎
切　豊竹古靱太夫
　　鶴澤清六

人形役割

妻相模　吉田文五郎
堤軍次　吉田玉幸
藤の局　吉田小兵吉
梶原平次景高　吉田玉徳
石屋彌陀六　吉田玉藏
熊谷次郎直實　吉田榮三
源義經　桐竹政龜
軍兵　大いぜい
百姓　大ぜい

木戸の外には、花も盛りの櫻木に近く、一枝を伐らば一指を切るべし、の制札が立つて居る。

落人と成つた平經盛が室藤の局は暫時の隱家を賴みに爰へ來て、圖らずも熊谷が妻相模に會ひ、我子敦盛の敵討に助太刀を賴んだりする。藤の局を兎も角も奥へ忍ばせた相模が、我子小次郎初陣の樣子や如何と案じて居る處へ、直實が思案の體で立歸り、相模を見ると不興顏、堅く言置いた詞に背き、女の身で陣中へ來た不屆を叱りつける。相模が、小次郎の初陣に心引かれて、つい百里近くの道を來て了つたと詫び、合戰の模樣を尋ねるのに、直實は、小次郎の比類無き働きから、また自分が敦盛の首級をあげた功名を語る。それを物蔭で聞いた藤の局、我子の敵と不意に切掛けるを熊谷は何奴と引据へたが、藤のお局と聞いて恟り上座に直して畏まる。と云ふのが、平家世盛りの頃、相模は藤のお局に仕へた者、一ト昔の以前、勤番の武士佐竹次郎と馴染み、御所を拔出で東へ

沈壽傳下
豊臣方勢大天
相勢的中ノ小

下つたが、其の佐竹次郎こそ今の熊谷次郎直實であつた。

改めて熊谷は、須磨の浦曲に是非なく敦盛を討つた次第を物語る。

今は藤の局も、戰場の常と詮方なく諦め、せめては回向の爲と、一間に飾つた我子の鎧の前に、遺品なる青葉の笛を吹いて手向けると、障子に人影、我子の姿よと駈寄るを相模が止める。

軈て直實は敦盛の首桶抱えて、實驗に供へ樣と立つ折柄、源義經が現はれて其首級を實驗し、制札の意を察してよく討つたと褒める。

熊谷が出陣の支度に奥へ入つた跡、前に石屋の彌陀六引立てゝ詮議に來て居た梶原景高、二心ある義經、熊谷を鎌倉殿へ注進と、呼ばはり乍ら駈出したが、彌陀六が石鑿の手裏劍に打たれて息絶へる。

邪魔になる木葉、拾つて上げましたと、彌陀六が其儘行過ぎ樣とするを、呼止めた義經が、彌平兵衛宗清と看破るので、其眼力に驚いた彌陀六、平治の亂の折、池殿と云合せて賴朝、義經を助けずば、平家は今に榮えんものと非憤の涙に暮れる。

出陣の時到移ると、義經が奥へ聲を掛ければ、直實が甲冑姿で現はれる。義經は一間から鎧櫃を取出させ、其方が大切に育てる娘に屆けて呉れと渡すを、內あらためた彌陀六は、敦盛が入つて居るので惜りする。相模は、我子小次郎が敦盛の身代りに死んだを始めて知つて非歡する。義經は其切なる心を察し、敦盛ならぬ小次郎の首級に名殘を惜ませる。

軈て義經が、西國出陣の時至れり、用意如何にと熊谷を勵ますに、直實が甲冑を脫げば墨染の衣頭も靑い今道心の姿で、改めて永の暇を願ふから義經も無理ならぬ望みを許し、我が父母の回向をも賴む。

直實は驚き悲む相模を制して、向ふは西方彌陀の國、黑谷の上人を師と賴み、名も蓮生と改めて

一笠一杖の僧とならむ、と心の中を語り、主從、親近、敵味方共に名殘を惜んだが、直實は一人別れ、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年は一昔、あゝ夢であつたなア、とほろりとなつた氣を取直すと黑谷さして別れ行く。

（床本）　熊谷陣屋の段（中）

行く空も、いつかはさえん須磨の月、平家は八島の浪に漂ひ、源氏は花の盛りを見る、中に勝れて熊谷が陣所は須磨に一構へ、要害嚴しき逆茂木の、中に若木の花ざかり、八重九重も及びなき、それかあらぬか人ごとに、熊谷櫻といふぞかし、花折らせじとの制札を、讀んで行く人讀めぬ人、一つ所に立ち集まり、扨も咲いたり〳〵花より美事な此制札辨慶殿の筆ぢやげな。扨も美事一つも讀めぬ。オヽあれはの、義經樣が此の花を惜しみ、一枝きらば指一本切るべしとの法度書、ヤア花のかはりに指きるとは首切る下地、オヽこはや、見てゐる中も虎の尾を踏む心地する。皆ござれ。と、花に嵐の臆病風、ちり〳〵にこそ、別れ行く。遙々と尋ねて爰へ熊谷が、妻の相模は子を思ひ、夫思ひの旅姿、陣屋の軒を爰や彼所と尋ねしが、幕に麕えの家の紋、嬉しや爰と内に入る、折節家の子堤軍次たち出で、これは〳〵奥樣か、オヽ軍次そなたも息災さうな、マアめでたい〳〵、熊谷殿や小次郎も變る事はないかの、早う逢ひたい逢はせてたも、ハア旦那は今日御廟參、小次郎樣は先頃より御前勤めで御下りなし、マア〳〵長の御旅路、お勞れをお休め。と挨拶とりどりなる所へ、敦盛卿のお母、藤の局虎口の難を遁れきて、こけつ轉びつ花の蔭、陣屋をめがけ走り付き、跡より追手の蒐る者、影を隱して給はれと、けはしき體に驚きて、相模は傍へ走り寄り、見るに見かはす互の顏、ヤアお前は藤のお局樣ではないか、さういやるそなたは相模ぢやないか、テモ久しや懷かしや、おゆかし樣や、と、手を取つて、マア此方へ、と伴ひ入る。したしき體に心をきかし、軍次は勝手に入りにけり。相模はやがて手をつかへ、誠に一昔は夢とまうすが、大内に御座遊ばす時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴れ初め、御所を拔け出で東へ下り、お前樣お身の上を承れば、御懷胎のお身ながら平家の御家門、參議經盛樣方へ緣づき給ふと

の噂、其の折は世盛りの平家、御威勢はますますと陰ながら悦びましたに、此の度源平のたゝかひ、御一門もちりちりと聞くに付け、アヽ此の藤の方様は何となされたどう遊ばしたと、一人苦にしてをりましたに、マア御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しや、オヽ其方も無事でマア嬉しい、懐胎で出やつた時の子は姫どぜか男か、息災で育てゝ居るか、と、ちよつと寄つても女同士、問ひつとはれつ年月に、つもる言葉くりかへし、嬉し涙の種ぞかし、藤の方涙ぐみ、世の盛衰はぜひもなや、其の時に産み落したは、無官太夫敦盛とて、器量發明揃うた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我のみ殘るうきなんぎ、淺ましの身の上と喞ち給へば、お道理〳〵、以前の御恩も有る、連合にも語り、お身の片付き後世の營み、お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申して、北面同然の武士、只今にては武藏國の住人、私の黨の旗頭、熊谷次郎直實と人もしつた侍と、聞くより御臺は、ヤア和女の連合の佐竹次郎、今では熊谷次郎といふか、アイ、すりやあの熊谷次郎は和女の夫よな、ハア、はつと吐胸の氣をしづめ、何と相模、以前大内にて不義顯はれ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院宣自らが申し宥め御所の御門を、夜の中に落してやつたを覺えてか、アツア其の時の御恩、何の忘れませうぞいなム、其の恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を自らに討たしてたも、エヽイそりやまた何のお恨みで、サアヌ最前も話した院の御所のお亂、無官太夫敦盛を、そちが夫熊谷が討つたわいの、エヽそりやまあ誠でござりますか、スリヤそなたは何にもしらぬか、サアはる〳〵と東より今來て今の物語り、聞いて吐胸の誠しからず、追付夫が歸り次第、様子を尋ぬる其の間、暫くお控へ下され。と、詞を盡し理を盡し、なだむる折に表より、梶原平次景高、所用有つて推參、と呼ばはる聲、ヤア何梶原とや、見付けられては御身の大事、先づ〳〵こちらへ、と御臺の手を取り、一間へ伴ふ其の中に、堤の軍次たち出で、今日は主人直實志あつて廟參、御用あらば某に仰せ置かれ下され、と、地に鼻付くれば平次景高、何熊谷殿は他行とな、ソレ家來共、其の石屋の親父め引立て來れ、はつ、と答へて科もなき白毫のみだ六を平次が前に引据うれば、ヤイなまくら親父め、汝何者に頼まれ、敦

盛が石塔は建てたやい、平家は殘らず西海へぼつくだし誂ふべき相手なければ、察する所源氏方の二股武士が頼みしに遣ひあるまい。サア眞直に白狀ひろげ、僞ると鉛の熱湯、脊骨をわつて流し込む、とおどしかけても正直一遍、テモさても御無理な御詮議、先程も申した通り、石塔の誂へ人は敦盛の幽靈五りんの事は扨置き、一厘も手附はとらず、建てると其の儘石塔の喰ひ逃げ、せめて人魂でも手附に取つたら、小提灯の代りに致しませうに冥土へ書出しはやられず、本の是れがそんしようぼだい有りやうの申し上げ願以此功德施一切、此の通りでござりまする、と取りじめなさ、アヽ何仰しやつても糠に釘と、軍次が詞に平次は惡智惠、大かた石塔を建てさせたわろも合點々々、熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議、先づ其奴めを引立て來たれ、と、一間へ入れば家來共、石屋の親父をむりやりに引立て奥へ連れて行く。

（床本）　熊谷陣屋の段（切）

奥へ連て行く、相模は障子押開き、日も早西に傾きしに、夫の歸りの遲さよと待つ間程なく熊谷次郎直實、花の盛りの敦盛を、討ちて無常を悟りしか、逗に猛き武士も、物の哀れを今ぞしる。思ひを胸に立ち歸り、妻の相模を尻目にかけて座に直れば軍次はやがて覆ひになり、先だつて平次景高殿、何か詮議の筋あるとて御影の石屋を引連れ御出であり、奥の一間に御待ちと委細を述ぶれば、ム、詮議とは何事ならん、アいや其方は一獻を催し梶原殿を饗し申せ、サア早くいけ〳〵。ハテさて何を猶豫する、と、呵りちらされ是非なくも相模に顏を見合はして、心を殘し入りにけり。跡見送りて熊谷は、コリヤ女房、其方は爰へ何しに來た、國元出立の節陣中へは便りも無用と、堅く言ひつけ置きたるに、詞に背くといひ剩へ、女の身で陣中へ來ること、不屆至極の女めと、不興の體に相模はもぢ〳〵、其のお呵りを存じながら、どうかかうかと案じるは小次郎が初陣、一里いたら樣子がしれうか、五里來たら便りがあろかと、七里歩み十里歩み、百里餘りの道をつい都までホヽ、オヽしんき、登つて聞けば一谷とやらで、今合戰の最中と、取り〳〵の噂ゆゑ、子に引かされるは親の因果、御了簡下さりませ、マア此の小次郎は息災で居ますか、と、とへば熊谷詞をあららげ、戰場へ赴くからは命はなき物、堅固を尋ぬる

未練な性根、若し討死したら何とする、いゝえいな、小次郎が初陣に、よき大將と引組んで討死でも致したら、嬉しい事でござんしよ、と、夫の心に隨ひし、健氣な詞に顏色直し、ホヽ先づ小次郎が手柄といふは、平山武者所と爭ひ拔けがけの高名、軍門にかけ入つての働き、手きず少々負うたれども、末代まで家の譽れ、エヽして其の手疵は急所ではござりませぬか、ソレまた手疵を悔む顏付、若し急所なら悲しいか、イエ何のいな、掠疵でも負ふ程の働きは、出かしたと思うて嬉しさの餘りお尋ね其の時お前も小次郎と一所にお出でなされたか、ホウ危しと見るより軍門にかけ入り、小次郎をむりに引立て小脇にひんだき、我が陣屋へ連れ歸り、某は其の軍に搦手の大將、無官太夫敦盛の首取つたり、と話に扨はと驚く相模、後に聞きゐる御臺所、我が子の敵、と有りあふ刀熊谷やらぬ、と拔く所、鐺掴んでヤア敵呼ばはり何奴、と、ひき寄するを女房取り付き、アヽこれこれ聊示なされな、貴方は藤の御局樣、と、聞いて直實惚りし、ハア思ひがけなき御對面、と、飛び退き敬ひ奉れば、コリヤ熊谷、軍の習ひとは言ひながら、年はも行かぬ若武者をようむごたらしう首討つたなア、サア約束ぢや相模、助太刀して夫を討たせ、何と〳〵、刀追取りせり付け給へば、アイ、あい〳〵と返事も胸にせまりながら、エヽ直實殿、敦盛樣は院のお胤としりながら、どう心得て討たしやんした、樣子が有らう其の譯を、と、いふもせつなきうろ〳〵涙、アヽ愚か〳〵、此の度の戰ひ敵と目ざすは平家の一門、敦盛は扨おき、誰彼と鐺を削るに用捨がならうか、イヤナウ藤の御方、戰場の儀は是非なしと、御諦め下さるべし。其の日の軍のあらましと、敦盛卿を討つたる次第、物語らん。と座を構へ、扨も去んぬる六日の夜、早東雲と明くる頃、一二を爭ひ拔けがけの、平山熊谷討取れと、切つて出でたる平家の軍勢、中に一際勝れし緋縅、さしもの平山あしらひ兼ね、濱邊をさして逃げ出す、ハテ健氣なる若武者や逃げる敵に目なかけそ、熊谷是れに控へたり、返せ、戻せ、オヽイおゝいと扇を持つて打招けば、駒の頭を立て直し、波の打物二打ち三打ち、いでや組まんと馬上ながらむんずと組み、兩馬が間にどうと落つ、ヤア〳〵何とその若武者を組み敷いてか、されば御顏をよく見奉ればかね黑々と細

眉に、年はいさよふ我が子の年ばい、定めで二親ましまさん、其の歎きはいか計りと、子を持つたる身の思ひの餘り、上帶取つてひき立て塵うち拂ひ、早落ち給へと、勸めさしやんしたか、そんなら討ち奉るお心ではなかつたの、オヽ、早落ち給へと勸むれど、イヤ一旦敵に組みしかれ、何面目に存へん、はや首取れよ熊谷、ナニ首取れというたかいの、健氣な事をいうたなアサア其の仰せにいとゞ猶、涙は胸にせき上し、まづ此の通りに我が子の小次郎、敵に組まれて命や捨てん淺ましきは武士の習ひと太刀も拔き兼ねしに、逃げ去つたる平山が、後の山より聲高く、熊谷こそ敦盛を組み敷きながら、助けるは二心に極まりし、と呼ばはる聲々、エヽ是非もなや、仰せ置かるる事あらば、言ひ傳へ參らせん、と申し上ぐれば、御涙を浮め給ひ、父は波濤へ赴き給ひ心に懸るは母人の御事、きのふにかはる雲井の空、定めなき世の中を、いかゞ過ぎ行き給ふらん、未來の迷ひ是一つ、熊谷賴む、の御一言、是非に及ばず御首を、と、話す中より藤の局、ナウ左程母をば思ふなら、經盛殿の討に付き、なぜ都へは身を隱さず、一谷へは向ひしぞ、健氣によそうた其のときは、母も俱々悅んですゝめてやりし、かはいやな、覺悟の上も今さらに、胸にせまりて悲しやと、くどき歎かせ給ふにぞ、御尤もとは思へども、相模は態と聲はげまし、いや申しお局樣、御一門殘らず八島の浦へ落ち行き給ふ中に、一人踏みとゞまり、討死なされた敦盛樣、數萬騎に勝れた高名、但し逃げのび身を隱し、人の笑ひを受け給ふが、おまへの氣では嬉しいか、御未練な御卑怯ないさめに熊谷、オヽでかした〳〵コリヤ女房、御臺所此の所に御座あつてはお爲にならぬ片時も早く何方へも御供せよ、サア〳〵早くいけいけ、我も敦盛の御首實檢に供へん、軍次はをらぬか早參れ、と呼ばはる聲と諸ともに、一間へこそは入相の、鐘は無常の時を打つ。陣屋々々の燈火に、いとゞ悲しき藤の方アヽ、思ひ出せばふびんやな、今はの際までもはなさず持ちたるは、コレ此の青葉の笛、我と我が身の石塔を建てて貰うた價にと、渡し置いた此の笛の、我が手に入りしも親子の緣、魂魄此の世に有るならば、なぜ母には見えぬぞ、聞えぬ我が子や懷かしの此の笛や、と肌に付け身に添へて、盡きせぬ思ひ遣瀨なき、コレ申し其の笛がよい御筐

經だらにより笛の音を手向けるが直に追善、敦盛様のお聲をば、聞くと思うて遊ばせと、勸めに隨ひ藤の方、涙にしめす歌口も、ふるうて音をぞすましける。親子の緣の絆にや障子に映る陽炎の、姿は慥か敦盛卿、藤の局は一目見るより、ヤレ懐しの我が子や、と、かけ寄給ふを相模は抱きとめ、香の煙に姿をあらはし、實方は死して再び都へ歸りしも一念のなす所、有るまい事にはあらねども、訝しき障子の影、殊に親子は一世と申せば御對面遊ばさば、御姿は消え失せん、イヤなう四十九日が其の間、魂宇宙に迷ふと聞く、せめては逢うて一言をと、ふりはなし〳〵、障子ぐわらりと明け給へば、姿は見えず緋縅の、鎧計り殘りける。はてと計りに藤の方、相模も俱に取り付いて、扨は鎧のかげなるか、戀しと迷ふ心から、お姿と見えけるか、と、俱にこがれて正體も泣きくどくこそ哀れなれ、時刻移ると次郎直實、首桶携へ立ち出づれば、相模は夫の袂を控へ、コレ申し是が親子御一生のお別れ、せめて御首なりとも、御暇乞、と願ふにぞ、藤の局も涙ながら、ナウ熊谷、そちも子の有る身でないか、野山の猛き獸さへ、子を悲しまぬはなき物を親の思ひも辨へて、情に一目見せてたも、と、縋り歎かせ給へども、イヤ實檢に備へぬ中内見は叶はぬ、と、はね退け突き退け行く所に、ヤア熊谷暫し暫し、敦盛の首持參に及ばず、義經これにて見ようずるわ、と、一間をさつと押し開き、立ち出で給ふ御大將、ハ、、、はつと次郎直實、思ひ寄らねば女房も、藤の局も諸共に呆れながらに平伏す、義經席に著き給ひ、ヤア直實、首實檢延引といひ、軍中にて暇をねがふ汝が心底訝しく、密かに來りて最前より、始終の樣子は奥にて聞く、急ぎ敦盛の首實驗せん、と仰せ聞くより熊谷は、はつと答へ走り出で、若木の櫻に立て置きし、制札引拔き恐れげなく、義經の御前に差置き、先つ頃堀川の御所にて六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短尺、此の熊谷には敦盛の首取れよとて、辨慶執筆の此の制札、即ち札の面の如く御諚に任せ、敦盛の首討取つたり、御實檢下さるべし。と蓋を取れば、やア其の首は、とかけ寄る女房、引きよせて息の根とめ、御臺は我が子と心も空、立ちより給へば首を覆ひ、コレ申し實驗に備へし後は、お目にかける此の首お騷ぎあるなと熊谷が、いさめに迫はしたなう、寄りも

寄られず悲しさの、ちゞに碎くる物思ひ、次郎直實謹んで、敦盛卿は院の御胤、此の花江南の所無は、即ち南面の嫩、一枝をきらば一指を切るべし、花に準へし制札の面、察し申し討つた此の首、御賢慮に叶ひしか、但し直實誤りしか、御批判いかに。と言上す、義經欣然と實檢まし〳〵、ホヽ花を惜しむ義經が心を察し、アよく討つたりな、敦盛に紛れなき其の首、ソレ由緣の人もあるべし、見せて名殘を惜しませよ、と、仰せ聞くより、コリヤ女房、敦盛の御首、藤の方へお目にかけよ、アイ、あいと計り女房は、あへなき首を手に取り上げ、見るも涙に塞がりて、かはる我が子の死顏に、胸はせき上げ身もふるはれ、持つたる首のゆるぐのを、頷くやうに思はれて、門出の時にふり返り、につと笑うた面ざしが、有ると思へば可愛さ不愍さ、聲さへ咽につまらせて、申し藤の方樣、御歎き有つた敦盛樣の此の首、ヒヤア是れはサイナな申し、これよう御らんあそばして、お恨みはらしよい首ぢやと、譽めておやりなされて下さりませ、申し此の首はな、私がお館で、熊谷殿と忍び逢ひ、懷胎ながら東へ下り、產み落したはナこれナ、此の敦盛さま、其の節おまへも御懷胎、誕生ありし其のお子が無官太夫樣、兩方ながらおなかに持ち、國を隔てゝ十六年、音信不通の主從が、お役に立つたも因緣かや、せめて最期は潔う死なされたか、と怨めしげに、とへど夫は瞬きも、せん方涙御前を恐れ、餘所にいひなす詞さへ、泣く音血を吐く思ひなり、藤の局は御聲曇り、ナウ相模、今の今まで我が子ぞと、思ひの外な熊谷の情、其方は嘸や悲しかろ、かうした事とは露しらず、敵を取らうと切らうのと、いふた詞が恥かしい、我が子の爲には命の親。忝いと手を合はせ、此の首の生世の中、逢ひ見ぬ事の悔しやと、俱に歎かせ給ひしが、是れに付きいぶかしきは此の濱の石塔、敦盛の幽靈が建てさせたと噂といひ、祕藏せし青葉の笛、石屋の娘が貰ひしとて我が手に入り、最前其の笛吹いた時、あの障子に移りしかげは、慥かに我が子と思ひしが、詞もかはさず消え失せしは、アいや其の笛の音を聞いてかけ出でし、敦盛の幽靈、人目ありと引きとゞめ、障子ごしの面かげは義經が志と、聞いて御臺は我が子の無事、悟りながらも帶木の、有りとは見えて隔てられ、又も涙にくれ給ふ、折節風に誘はれて、耳を突きぬく螺貝の、音かまびすく聞ゆれば、義經はいさみ立ち、ヤア〳〵熊谷、著到知らせの螺の音、出陣の用意

用意。と、仰せに直實畏まり、急ぎ一間に入りにけり、最前より樣子を聞き居る梶原平次、一間の内より躍り出で、斯くあらんと思ひし故、石屋めを詮議に事よせ窺ふ所義經、熊谷心を合はせ、敦盛を助けし段々鎌倉へ注進と、言ひ捨て驅け出す後より、はつしと打つたる手裏劍は、骨を貫く鋼鐵の石鑿、うんと計りに息絶ゆる。スハ何者といふ中に、たち出づる石屋の親父、ハヽアお前方の邪魔になる、こつぱを捨てゝ上げました、扨て幽靈の御講釋承つて先づ安堵もうお暇、と立ち行くを、ヤア待て親父、コリヤ彌平兵衛宗清待て、と、義經の詞に恟りはつと思へどそらさぬ顏、ハレやれ〳〵とつけもない、御影の里に隱れのない、白毫のみだ六といふ男でえす。ハヽヽヽ誠や諺にも、至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此の三つは、人間一生忘れずといふ、其の昔母常磐の懷に抱かれ、伏見の里にて雪に凍えしを、汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ、其の時は我三歳なれども、面影は目先に殘り、見覺えある、眉間のほくろ、隱しても隱されまじ、重盛卒去の後は、行方知れずと聞きしが、ハテ堅固で居たな滿足や、と聞くよりみだ六づか〳〵と立ち寄り、義經の顏穴の明く程打眺め、テも恐ろしい眼力ぢやよなア、孝子は生まれながらに聰く、莊子は三つにして人相をしると聞きしが、斯く彌平兵衛宗清と見られた上はエヽ義經殿、其の時此方を見遁さずば、今平家の楯籠る鐵拐が峯、鵯越を責め落す大將はあるまい物、又池殿と言ひ合はせ、賴朝を助けずば、平家は今に榮えん物、エヽ宗清が一生の不覺、是れに付けても小松殿御臨終の折から平家の運命末危し、汝武門を遁れ身を隱し一門の跡弔へと、唐土育王山へ、祠堂金と僞り、三千兩の黃金と、忘れ筐の姫君一人預り、御影の里へ身退き、平家の一門立ち給ふ御方々の石碑、播州一國那智高野、近國他國に建て置きし、施主の知れぬ石塔は、皆これ彌平兵衛宗清が、涙の種と存じしらずや、今度敦盛の石塔誂へに見えし時も、御幼少にて御別れ申せし故御顏は見覺えねども、心得ぬ風俗はヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより、心能く受合ひしが、扨は命にかはりし小次郎が菩提の爲、此の濱の石塔は敦盛の志にてありけるか、ヘツエいかに天命歸すればとて、我が助けし賴朝、義經此の兩人の軍配にて、平家の一門御公達一時に亡ぶるとは、ハア是非もなき運命やな、平家の爲に獅子身中の蟲とは我が事、嘸御一門、陪臣の魂魄、我を恨みん淺

ましや、と或は悔み、或ひは怒り、涙は瀧を爭へり。元來さとき大將義經、ヤア〳〵熊谷、障子の內の鎧櫃、ソレ此方へ、はつ、と答へて次郎直實、出陣の出立と好む所の大荒目、鍬形の兜を着し、抱へ出でたる鎧櫃、御目通りに置く、コリヤ親父、其方が大切に育つる娘へ、此の鎧櫃屆けてくれよ、コリヤ彌陀六、ヤアみだ六とは、フウ宗淸なれば平家の餘類、源氏の大將が賴むべき筋はム、面白い、みだ六め賴まれて進ぜましよ、したが娘へは不相應な下され物、マア內は何でござります。改めて見ませう、と、蓋押しあくれば敦盛卿、ナウ懷かしや、と藤の方、かけ寄り給へば蓋ぴつしやり、イヤ此の內には何にもない、オ、何もない〳〵〳〵、ホ、是れで些と蟲が納まつた。ナウ直實、貴殿への御禮はコレ〳〵此の制札、一枝をきらば一指を切つて、ヘツエ、忝い。と、いふに相模は夫に向ひ、我が子の死んだも忠義と聞けばもうあきらめて居ながらも、源平と別れし中、どうしてまあ敦盛樣と、小次郎を取りかへようか、ハテ最前も話した通り、手負と僞り、無理に小脇にひつぱさみ、連れ歸つたが敦盛卿、又平山を追つかけ出たを、呼びかへして首討つたのが小次郎さ、知れた事を、と尖なる話に相模はむせび入り、エ、どうよくな熊谷殿、こなた一人の子がいなら、逢はう〳〵と樂しんで、百里二百里きたものを、とつくりと譯もいはず、首討つたのが小次郎さ、しれたことを、ともぎだうに、叱る計りが手柄でも、ござんすまい、と聲を上げ、泣きくどくこそ道理なれ。心を汲んで御大將、いさみを付けんと、ヤア〳〵熊谷、西國出陣時移る、用意いかに、と仰せに直實、恐れながら先だつて願ひ上げし暇の一件、かくの通りと兜を取れば切り拂うたる有髮の僧、義經も感心あり、ホ、さも有りなん、それ武士の高名譽を望むも、子孫に傳へん家の面目、其の傳ふべき子を先だて、軍に立てん望みは、ホウ尤も、コリヤ熊谷、願ひに任せ暇を得さするぞ、汝堅固に出家をとげ、父義朝や母常磐の廻向も賴む、親しき御諚、ハヽア有り難し、とたち上り、下帶を引解き、鎧をぬげば袈裟白無垢、相模、是れは、と取りつくを、ヤア何驚く女房、大將の御情にて、軍半ばに願ひの通り御暇を賜はりし我が本懷、熊谷が向ふは西方彌陀の國、伜小次郎が拔けがけしたる九品蓮臺、一つ蓮の緣を結び今より我が名も蓮生と改めん、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年も一昔、ア夢で有つたなあ、と、ほろりとこぼす

涙の露、柊に置く初雪の、日蔭にとける風情なり。オ、さうぢや〳〵、我が子の罪障消滅の、加勢は是れ、と切つたる黒髪詞はなくて御大將、藤の局も諸共に、御涙にぞくれ給ふ。長居は無益と彌陀六は鎧櫃にれんじやくをかけた思案のしめ括り、コレ〳〵〳〵義經殿、若し又敦盛生き返り、平家の殘黨驅り集め、恩を仇にて返さばいかに、オ、夫れこそは義經や、兄頼朝が助かりて、仇を報いし其の如く、天運次第恨みを請けん、げに其の時は此の熊谷、浮世を捨てゝ不隨者と、源平兩家に由緒はなし、互に爭ふ修羅道の、苦患をたすける廻向の役、此の彌陀六は折りを得て、又宗清と心の還俗、我は心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み、敎へを請けんいざさらば、君にも益々御安泰、お暇申す、と夫婦づれ、石屋は藤の御局を、伴ひ出づる陣屋の軒、御緣が有らばと、女同士命があらば、と男同士、堅固で暮せ、の御上意に、有り難涙名殘の涙、又思ひ出す小次郎が、首を手づから御大將、此の須磨寺に取り納め、末世末代敦盛と、其の名は朽ちぬこがねざね、武藏坊が制札、花を惜しめど花よりも、惜しむ子を捨て、すみ所さへ定めなき、有爲轉變の世の中やと、互に見合はす顔と顔、さらば〳〵おさらばの、聲も涙にかき曇り、別れてこそは出でて行く。

二代目　豐竹古靱太夫略傳

明治十一年十二月十五日東京淺草に生る。同十八年八才の頃より同地の竹本政子太夫に義太夫節の手ほどきを受け、十二才の四月、大阪に出、二代目竹本津太夫の門に入り、竹本津葉芽太夫と名乘り、御靈文樂座に出勤、「大序」に入る。翌年十三才の明治二十三年十一月、同座にて「苅萱桑門筑紫轡」の「高野山」にて掛合の石童丸を勤め、「大序」をぬけ、十六才の時一時上京して、四代目竹本播磨太夫の傘下に入り、初代竹本綾瀨太夫の二枚目、津葉芽太夫は三枚目にて各寄席を巡回したが、同年神戸の「はり半」の養子となつた。當時「はり半」は、三代目竹本大隅太夫、名人豐澤團平の太夫本を勤めてゐたので、津葉芽太夫は、大隅、團平と共に東海道を巡業した。明治廿七年三月稻荷座の創立と同時に同座に入つたが、十八才の時文樂座へ復歸した。その後、一兩度巡業に出た後、三十二才の明治四十二年四月、「伽羅先代萩」の「竹の間」を語り、二代目豐竹古靱太夫を襲名した。同六月より合三味線に三代目鶴澤清六を得て、血の出る樣な訓導を受け、今日の大成を見るに至つた。

（鴻池幸武氏稿による）

紙屋内の段（役毎日替）

前　豐竹呂太夫
豐澤仙糸

後　竹本織太夫
竹本團六

人形役割

紙屋治兵衛　吉田榮三
女房おさん　吉田文五郎
丁稚三五郎　桐竹紋司
舅五左衛門　桐竹門造
娘お末　桐竹紋之助
伜勘太郎　桐竹小紋
紀の國屋小春　桐竹紋十郎
江戸屋太兵衛　吉田玉市
五貫屋善六　吉田多三郎

天網島時雨炬燵（てんのあみじましぐれのこたつ）

紙屋内の段

享保五年十月十四日（二三八〇）十夜回向の夜、大阪天滿の紙屋治兵衛と曾根崎新地の紀の國屋の抱へ小春とが網島大長寺で佛の敎に安心立命して情死を遂げた事實談をすぐさま脚色して、同年十二月六日から竹本座の舞臺にのせたのが近松門左衛門作「心中天網島」全三段でこれを土臺にその後種々の改作が出た――例へば寶暦五年七月（二四一五）豐竹座上演の「双扇長柄松」（並木永輔、淺田一鳥、難波三藏、三津飲子、黒藏主、豐竹上野合作）、明和六年七月（二四二九）竹本座上演の「中元噂掛鯛」（三好松洛、竹本嘉藏合作）、安永七年四月（二四三八）北の新地竹田万次郎座上演の「心中紙屋治兵衛」（近松半二、竹田文吉合作）等で、改作物としては半二のものが最も勝れて居り、近松の原作を增補改修して舞臺を賑はし、筋は複雜技巧的になつた。

尙、以上の改作物以外に、寛政以後「增補天網島」の

藝題で專ら上演されてゐるこの度の「天網島時雨炬燵」紙屋内の段がある。この事に就いては豐竹古靱太夫氏は「丸本のことなど」（昭和十六年一月「創元」誌）の中で「……此外題の物は丸本には有りませんので一段物で增補したものかと思ふておりましたが、皆違つた外題の中に入つて有ります物を少しく文章書きかへて、此外題を附けて語り出したもので……」時雨炬燵の紙屋内は「置土產今織上布」の中に含まれて居ることを指摘し、「……此丸本は曾根崎新地での出來事、彼の菊野殺し五人斬と小春治兵衛を一つにまとめた淨瑠璃で、其中の中の卷がそれである。尤も終りの所は少し文章違へども、子供が尼になつて來て白無垢のちらし書を讀む所もある是を時雨炬燵と外題を替へて語り出せしが今日迄殘つて結構な近松作の天網島紙屋内から大和屋の段が埋れて仕舞つた……」とある。因みに「置土產今織上布」は菅專助、豐春曉、若竹笛躬の合作で、安永六年五月十九日（二四三七）から北堀江座に上演されたもので、要するに本曲も「……或外題の中にある物に新に表題を附て流行した物が澤山にある……」その中の一つの場合であると書かれてゐる。

梗概

兄粉屋孫右衛門とおさんの母親を送り出した治兵衛は、傍に有合はせの定木を枕に、うたゝ寢の炬燵に入つた。

いま出て行つた姑に書いてやつた誓紙、それは紀の國屋の小春とは、もうぷつつり緣は切る、と云ふのだつた。

それにつけてもあの夜河庄での小春の愛想づかしが口惜しかつた。然し何と云はれても可愛いものは可愛かつた。そして何べん思つてもそれは口惜しかつた。そして、じつとして居ても、何時か涙が沁み出して來るのをどうする事も出來なかつた。

これを見つめて居たおさんは傍へ寄つて、涙にしめる蒲團をかきのけた。そしてさめ〴〵と又かき口說くのだつた。

治兵衛にしてみれば、このおさんのやさしい心が、どれだけ有難かつたか知れない。あれから十日たつかたゝない中に、あれ程嫌ひぬいて居た太兵衛に請出されることになつた小春、さうした義理知らずには心殘りはないけれど、金の工面に盡きた故と、問屋中の仲間から云はれるのが辛いのだ、と口惜しさうに話すのだつた。

おさんは譯を聞いてうろたへた。小春が太兵衛に身請けされることになつたら、かならず生きては居ない、死ぬ氣なのだ、と云ふのである。

治兵衛も合點が行かずこれを訝かつた。おさんは此處にはじめて、自分が小春に手紙をやつて、治兵衛と切れて呉れと賴んだ經緯を話すのだつた。そして、小春を殺しては義理が立たない、どうぞ命が助けたい、と誠を明かした。これを聞いた治兵衛は、今更義理知らずの畜生のと、小春を恨んだ自分の心根が恥かしかつた。然し小春の身請には、せめてもその半金百五十兩が必要だつた。

今の身の上で百五十兩の大金、それは到底出來ることではなかつた。おさんはこれを聞いて、晦

日の仕切銀にと才覽して置いた五十兩、それに不足は着類簪など取り纏め質置きしやうと、丁稚三五郎に荷物を背負はさうとしたのだつた。所へぬつと入つて來たのは舅の五左衛門だつた。

舅はこの樣子を見て、又質まで置いて遊里通ひ大方こんなことかと思つた。サアおさんに暇をやれ、最前の誓紙にだまされることぢやない。誓紙の代りに去狀書け、と怒鳴りちらした。

おさんは、內の身代の衰へたのも、皆舅ゆへ、銀山にかゝつて大金を融通させ、その證文も殘らず戻した恩も忘れ勿體ない、と父を泣いてなだめるのだつたが、それにもかまはず、五左衛門は簞笥の中をあらため、無理におさんを引立てゝ出て行つてしまつた。

表には何時の間にか小春が來て居た。內の樣子を窺つた小春は、治兵衛に縋つて、死ぬ覺悟をするのだつた。

其處へ來たのは、孫右衛門に連れて行かれた治兵衛の娘お末だつた。墨染の衣を身に纏ひ、何やら譯あり氣なので、上に着た衣を脫がせると、白い着物の袖におさんの自筆で、治兵衛小春が末長く夫婦になつて添つてくれと書いてあつた。又五左衛門の筆で、簞笥に入れて置いた金子で小春を身請けして呉れとあるので、二人は初めて五左衛門の本性を知り、又おさんの厚い志に泣くのだつた。その折柄、江戸屋太兵衛と五貫屋善六が無遠慮にもづか〳〵と入つて來て、無理に小春を連れて行かうとするのだ。治兵衛が止めると、打つてかゝるので、危いと治兵衛は三五郎に云ひ付け、お末を連れて逃がした。

善六太兵衛は、更に脇差まで拔いて治兵衛にかゝつて來るので、今はこれ迄と、挑み合ひ、遂に治兵衛は二人を殺してしまつた。

思ひがけなく殺人までしてしまつた治兵衛は、かねての覺悟と小春と手に手をとつて、死場所網島大長寺へと急いだのであつた。

（佐和利）紙屋内の段

イエ〳〵憎いさうな〳〵憎ましやんすが嘘かいなア、一昨年の十月、中の亥の子に、炬燵明けた祝儀とて、コレ爰で枕並べてこのかたは、女房の懐には鬼が住むか、蛇が住むか、それほど心殘りなら泣しやんせ泣しやんせ其涙が蜆川へ流れたら、小春が汲んで、呑みやらうぞ、餘りむごい治兵衛さん、なんぼお前にどの様な、切ない義理があるとても、二人の子供は、お前なんともないかいな、と心の限り口説き立て、恨み歎くぞ誠なる。

そりや胴慾なおさん様、これまで恪氣もなされずに、逢はしてたまはる其御恩、聞き入れたるが枷になり、こんな事なら其時に、なぜさう云うては下さんせぬ、コレナア申し治兵衛さん、おさん様を呼び戻し、千年も萬年も添ひとげて下さんせ、此の子は可愛う、エエマないかいな、見れば見るほどいたいけな、愛に滓るゝおさな子の、乳房にはなるゝいぢらしや、孤兒となしたるのも、皆私から起つた事、堪忍してとばかりにて、取り亂したる詫び涙、晴れ間もわかず降りしきる。

義經千本櫻

道行初音旅

延享四年（二四〇七）十一月十六日初日で竹本座にて上演。作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳。全五段からなり、二段目の渡海屋から大物ケ浦、三段目の椎の木から小金吾討死、鮨屋、四段目の道行初音の旅から川連館まで等が殊に有名である。義經傳説中の堀川夜討、大物浦、吉野落等が骨子となつてゐるが、佐藤忠信を重用した上、壇の浦敗北後の平知盛（渡海屋銀平）、平維盛（鮨屋彌助）、能登守平敎經（横河覺範）等を把へて後日譚の形式に活かし、結果からみて義經の傳説そのものよりも忠信に關する部分が中心となり、又一貫してゐるとも見られるが、そこに平家方を中心とした三種の挿話を夫々脚色性を保たしめつゝ有機的に巧みに統一し成功した淨曲中の名作である。

（床本）道行初音旅

戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや、

道行初音旅

靜御前　竹本重太夫
ッ　竹本雛太夫
竹本播路太夫
竹本隅若太夫
豐竹松島太夫
レ　竹本長尾太夫
豐澤新左衛門
豐澤廣助

鶴澤友造　鶴澤友平　豊澤猿二郎　豊澤叶太郎　鶴澤友作　鶴澤友太郎　鶴澤若　豊澤仙松

忠とまことの武士に君が情とあづけられ、しづかに忍ぶ都をば後に見捨てゝたびたちて、つくらぬなりもよしつねの御行末は、なにはづのなみにゆられて、たゞよひて今はよしのと人づてのうはさを道のしほりにて、大和路さしてしたひゆく。見渡せばよもの梢もほころびて、梅が枝うたふうたひめのさとの男が聲々にわがつまがてんじやうぬけてすえるぜん、ひるのまくらはつがもなや、天じようぬけてすえるぜん、ひるのまくらはつがもなやヲヽつがもなや、おかしからすの一ふしに、人もわらやのそだちにも、春ははねつくてまり、ひいふうつくづくときけばこち風音そへて、こぞの氷を德若に、ごまんざいと君もさかへましますありけふありや。たのもしやさぞなやまとの人ならば、御かくれがをいざ問はん、われも初音の此つゞみ、君のさかへを壽ぎて、むかしを今になすよしもがな、たにのうぐひすもはつねのつゞみ〳〵しらべあやなす音につれて、つれてまねくさおくればせなる忠信が旅すがた、せなに風呂敷をしかとせたらおふて、野みちあぜみちゆらり〳〵かるい取なりいそ〳〵をめだゝぬ樣に道へだて、女中の足とあなどつて嘸お待か

忠信　竹本住太夫

野澤喜代之助

ッ　豊澤團伊三

ッレ　野澤吉季

人形役割

靜御前　桐竹紋十郎

狐忠信　吉田玉幸

ね、こゝ幸ひの人目なしとせいめいそへて賜はりし、御きせながを取出し、きみと敬ひ奉る、靜はつゞみを御額とよそへて、上におきの石、人こそ知らぬ西國へ、御げこうの御かいしよう、浪風あらく御船を住吉浦に吹上られ、夫よりよしのにまします由、やがてぞ參り候はんとたがひにかたみをとりおさめ、雁とつばめはどちらが可愛、やゝを育つるつばめが可愛い、花を見すてるかりがねならば、ふみの便りも又の緣、エゝそふじやいな〳〵うたふ聲々面白や、實に此鎧を賜はりしも、兄繼信が忠勤也、誠にそれよ越方の思ひぞ出る壇の浦の海に兵船平家の赤旗陸に白旗源氏の强者アラ物々しやと夕日影に長刀を引そばめ、何某は平家の侍惡七兵衛景淸と、名乘かけ〳〵なぎ立て〳〵なぎ立つれば、花にあらしの、ちり〳〵ばつと木の葉武者、言ひがひなし出や旁々よ、三尾の谷の四郎是にあり、と渚に丁と打つてかゝる刀を拂ふ長刀のゑならぬ振舞何れ共勝り劣りも波の音、打合太刀の鍔元より折て引汐歸るかり、勝負の花を見捨つるかと長刀小脇にかい込で兜のしころを引摑み、後へ引くあしよろ〳〵〳〵、向ふへ行足たゞ〴〵〴〵、むんづとしこ

ろを引切て双方尻居にどつかと座す、腕の强さと言ひければ首の骨こそ强けれと、ハハヽヽホヽヽ、笑ひし後は入亂れ、手しげきはたらき兄繼信、君の御馬の矢表に駒をかけすへて立ふさがる、オヽ聞及ぶ其時に平家の方には名高き强弓能登の守敎經と名乘もあへず、よつぴいて放つ矢さきはうらめしや兄繼信が胸板に、たまりもあへず眞逆樣、あへなき最期は武士の、忠臣義士の名を殘す思ひ出るも涙にて袖はかはかぬつゝ井筒、いつか御身もの びやかに、春の柳生の糸ながく、枝をつらぬる御ちぎりなどかはくちしかるべきと、たがひにいさめいさめられ、急ぐとすれどはかどらぬ芦原峠かうのさと、つちだむつだも遠からぬ、のぢの春風吹はらひくもと見まがふ三芳野の麓の里にぞつきにける。

出版豫告

序文　豊竹古靱太夫
　　齋藤清二郎著

文樂かしらの研究

内容　四六倍判
　　精巧寫眞版百四十頁
　　原色版六葉
　　本文記事百頁
　　定價未定

文樂かしらに關する貴重なる我邦最初の文獻

三月刊行豫定

發行所　東京アトリエ社

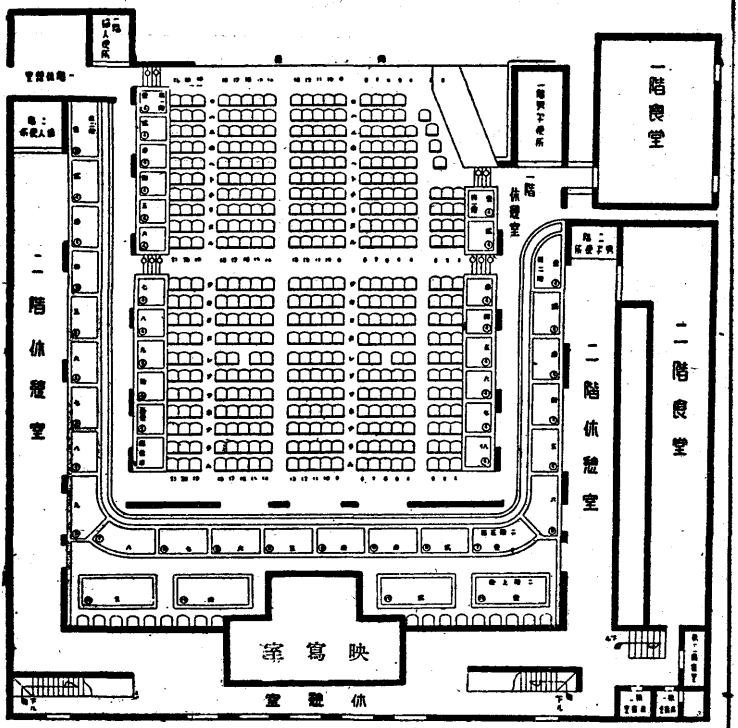
●豫約御申込は文樂座賣店へ●

觀賞おぼえ

昭和十七年正月　日

御所櫻堀川夜討		浦里時次郎 明烏六花曙
	一谷嫩軍記	
		天網島時雨炬燵
		義經千本櫻
		新曲末廣加利

文樂座御席場御案内



御觀覽席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

正月の芝居御案内

神戸湊川	京都四條	堀道頓	堀道頓	阪大
松竹劇場	南座	角座	中座	歌舞伎座
四〇四四川湊話電	五五一一園祇話電	二二二南話電	九七二一南話電	六二八二戎話電
元旦初日 毎日三時半開演	元旦初日	一卅日初日 正晝四夜 午半時 二回開演	元旦初日 正晝五夜 午時 二部開演	元日初日 正晝五夜 午時 二回開演
新生新派 初春興行	新興演藝大會	厚生劇	新春大歌舞伎	松竹家庭劇 吉例初春公演
第一 山參道 第二 並木洋服店 第三 すみだ川		第一 初すがた 第二 操三番 第三 小叟指 第四 南進	初春曾我對面 三人片輪 假名手本忠臣藏 歌がるた（晝の部） 時一元 谷嫩 忠臣 藏宗記 三ツの旗 菊の葉 一春ゆ 駒吉（夜の部）	第一 ピント外れ 第二 おさん茂兵衛 第三 山の紅葉 第四 十二月八日 第五 玩具の機關銃
觀覽料 四等席六十錢 三等席一圓二十錢 二等席二圓 一等席三圓五十錢（税別）	觀劇料 紅札五十四錢 三等席七十七錢 二等席一圓十五錢 一等席一圓七十九錢（税別）	觀劇料 四等席五十錢 三等席七十錢 二等席一圓 一等席一圓五十錢 特等席二圓二十五錢（税別）	一部觀劇料 四等席五十錢 三等席五十錢 二等席一圓八十錢 一等席二圓三十錢 特等席三圓八十六錢 四十四錢（税別）	觀劇料 櫻席五十錢 菊席八十錢 三等席一圓三十錢 二等席二圓二十錢 一等席（税別）

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆樣御承知の通り我大阪に於ける鄕土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でムるます。

文樂座人形淨瑠璃は 當に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。從つて開場毎にこの大使命が全う出來ますやう、皆樣の御期待に背かぬ樣、皆樣に御滿足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客樣の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ゐます。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ゐます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ゐます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお斷り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐます。

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般從業員に不行屆の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆樣へ御案内◇

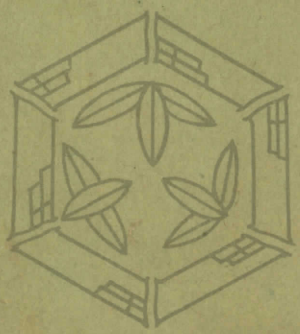
當座は此度皆樣へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第參上、どうぞ御利用下さいませ。

專用電話南㊱三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十六年十二月廿一日印刷　大阪市南區久左衛門町八番地
昭和十七年一月一日發行　發行所 松竹株式會社大阪支店
・大阪市南區久左衛門町八 印刷機械 松竹株式會社大阪支店内 印刷人 鳥江銕也
大阪市西區土佐堀通一丁目十二 印刷所 永井日英堂印刷所
一部 ㊥金二十錢